

歴史地理学と応用地理学

中 田 栄 一

- I. 応用地理学と共同調査
- II. 応用地理学の基礎としての歴史地理学
- III. 道路建設と古代道路

I. 応用地理学と共同調査

第二次世界大戦後、日本や世界の地理学界で関心をもたれ、さかんになった分野に応用地理学がある。学問の研究は研究そのものが目的であり、その成果は学問の発達に貢献するものであればよいが、現実的には学問の発達は政治・経済・社会の動きと無関係ではなく、むしろその要請、必要性、すなわち実用的目的によるものが多い。したがって、現代の科学では学問性そのものが要求されるいっぽう、その実用面や応用面も強調される。地理学の発達も政治、経済、社会の動きと関わりをもつことは、地理学史の示すところである。しかし今日のように、学問の発達によって専門化が進むと、地理学の応用面についての再検討が必要になる。例えば、地理学の応用面として「地域開発」がとりあげられ、大学や大学院の地理学専攻課程においても「地域開発」に関する科目の設置が望ましいとされる。地理学は地表の諸地域を研究対象とするものであり、したがってそれぞれの地域の開発について究明し、地域の未来像を求めるとともに、その実現への具体的開発計画や政策に力となることが地理学の応用面とされる。しかしわが国の現実では、地域の将来について考え開発計画をたてるのは地理学の専攻者

よりはむしろ法学、政治学、経済学などを専攻した官僚、政治家、実業家や学者、あるいは地域を構成する個々の事象の研究に従事する社会学、心理学、農学、林学、土木工学などの出身者や専攻者が多い。わが国では地理学専攻出身者で地域開発や地域のさまざまな開発計画に実際に参加するものが漸次多くなり、またその主導的立場にたつようになったものも出るようになったようであるが、他の諸科学の専攻分野に比べて必ずしも多いとはいえない。すなわち地理学の応用面の開拓は、少なくともわが国の現実では、十分に進められているとはいえないであろう。

實際上、地域の計画や政策には一つの科学の応用のみで済む場合は少なく、いくつかの学問の専門分野の協力が必要である場合が多い。それは、現実目標とされるものは、一つの科学の対象に限られる場合よりは、複数の科学の対象の総合的性格をもつものが多いからである。農業開発をとりあげても、農学、農業経済学、農業工学、土壌学、気象学その他数多くの学問分野の共同的应用によるものである。「地域開発」の問題は、地理学の応用のみで解決されその目的が達成されるものではなく、地域を構成し、相互に関連のある諸事象を対象とする諸科学の応用面の協力によって果たされるのである。この場合、地域開発の現実的計画の策定やその実施において、地理学はいかなる方向からいかなる分野を担当するかを十分に検討してかからなければならない。地理学は地域を対象にするの

だからとの漠然とした考えから、「地域開発」は地理学の独壇場であって他の科学は関わるべきではない、との考え方では、応用地理学は除け者にされてしまうであろう。

わが国における学問間、各学会間の研究・調査の上での協力態勢や学際的研究は、第二次世界大戦以降さかんに行われるようになったが、はたして十分に満足し得る成果があげられてきたであろうか。

現在すでに解散した九学会連合も、第二次世界大戦後間もなく渋沢敬三氏の提唱によって組織され、共同調査や共同研究が始まったが、その趣旨は、比較的研究領域の近接している学問間の協力態勢をつくるとともに、学際的研究を目指すものであった。日本地理学会をはじめ日本社会学会、日本心理学会、日本宗教学会、日本人類学会、日本民族学会、日本民俗学会、日本言語学会、東洋音楽学会など、各学問分野の日本を代表する各学会で、日本考古学会も加入学会であったことがある。歴史学、法学、経済学、政治学などの大きな学問分野は、日本を代表する学会が明瞭でないため加入せず、これらの学問分野に関する調査、研究は、加入学会のうちで然るべき分野を担当している者があたった。例えばどのような地域でも関連のある歴史の領域は、日本地理学会の歴史地理学の然るべき研究者が調査・研究にあたった。

九学会連合では、対馬、能登、奄美、佐渡、下北、利根川、沖縄などの共同調査や共同課題による研究を調査報告書や機関誌「人類科学」にその成果を発表し、大きな成果をあげてきたが、反省点として、特に共同調査の面で痛感させられたことがある。それは九学会連合に参加している地理学会以外の各学会では、調査対象地域の自然・人文・社会的諸事象のうち、専攻科学の対象にのみ限り、その実態を忠実に把握し分析しようとするが、それはあくまで人類社会、人類文化における一事例として意識され、考察されている傾向が

強く、当該対象地域の一事象として把握しようとする傾向が弱いということである。これは学問の性格上当然のことであろう。もちろん、九学会連合の共同調査の目標の一つとされていた日本文化の源の探求や伝播や展開の過程についての関心はあるにせよ、特定の地域の性格や構造についての関心は比較的弱いことである。

地理学は諸事象を具体的な地域に即し、地表の諸地域との関わりにおいて認識し、特に人文地理学は地表の自然との関わりにおいて人間の活動や社会・文化をとらえてゆく。それは、社会や文化そのものの構造や一般的性格をとらえようとするのではなく、あくまで地域空間の構造において眺め、地域におけるその意義、地域の変貌や動態におけるその役割を認識しようとする。地表の具体的地域に即して社会や文化をとらえようとするため、その地域的特性や分布、とりわけ地域により異なる自然環境との関わりや他地域との関連に注目する。すなわち、人文地理学は具体的地域における社会や文化の特質を、それぞれ個々の人文的社会的事象を対象とする専門諸科学と協力して明らかにし、地域のいかなる自然とどのように関わりをもちながら、どのように形成され成立したかを分析する。かつて九学会連合の利根川流域の共同調査に際し、日本心理学会は「利根川の流域の農村における新しい農業技術の伝播とその社会心理的要因」を課題²⁾としてとりあげたが、それはこの課題に関する社会心理学の一事例研究として調べられており、「利根川流域」を明らかにするためにとりあげられたというより、「農村における新しい農業技術の伝播とその社会心理的要因」とりわけ「技術伝播の社会心理的要因」に関する一事例研究としてとりあげられて調査された傾向が強い。これは社会心理学からいえば当然のことであろう。人文地理学の視角からすればむしろ、利根川流域の一農村において、その地域のいかなる自然条

件や社会条件のもとで、以上の課題の現象がどのように展開しているかを調べる。かくて心理学と人文地理学は一つの地域において協力しながら、それぞれの視角からそれぞれの方法によって調べることになる。

九学会連合の共同調査は、ただ地域を同じくするだけで、各専門科学それぞれが対象とする事象の個別的な調査・研究の集積で、互いに噛み合う部分が少なく、共同調査としての成果は必ずしも十分にあげられているとはいえない状況であったように思う。此の点、共同調査の対象として特定の地域がとりあげられた場合は当然、幅広い地理学の視角からみれば、調査・研究の上での地理学の責任は重いものとならざるをえないであろう。そして、各学会の調査課題を、地域の構造を分析する観点からそれぞれの課題のもつ意義を考察し、一つの地域の現象として結びつけて考えるように心がけるべきものであると思う。

II. 応用地理学の基礎としての歴史地理学

歴史学では、歴史を学ぶのは将来のためであるというが、これは歴史学ばかりでなく、さまざまな学問分野の研究はいずれも将来の行動や計画、建設に関わりをもつ。過去のことであるゆえに将来とは無関係であるとはいえない。もちろん、将来への志向は現在・現状に立脚するが、過去の状況について知ることも必要である。現在と過去の状況は理想を構成し、将来像を描き、開発、計画、建設の具体的方途を導き出す。歴史地理学の研究によって明らかにされた過去の地域の状況はもちろん将来の地域と同じでなく、地域の将来像は人の理想、願望によってそれが変えられたものである。国なり地方自治体などから委託調査を受け、調査を行ってその報告書を書く段になると、どうあるべきか、どうすればよいかについて報告すればよろしく、その結論にいたる調査の過程や実績についての報告は必要でないといわれることがある。委託す

る方からみればそれでよいかもしれないが、結論を出す側からいえば調査結果の内容、その結論にいたる道筋や理由について充分の検討を加えた結果でなければならない。

単独の調査ではなく共同調査で委託をうける場合、委託をうけたスタッフと如何に協力して委託した者の希望、目的に応じるかを考える。その場合、地理学はどのような視角から何を調べ、調査・研究の目的の達成に貢献するかを考える。そこで地理学に要求されることは、その研究の幅の広さと、他の専門分野のスタッフと柔軟かつ積極的に協力する必要があることである。地理学の応用面の拡大に必要なことは、地理学自体の方法論的反省と、地理学と他の諸科学との関係についての十分な理解であろう。

応用地理学にとって大切なことは、対象地域の実情や特性についての知識、当該地域を構成する諸事象それぞれの間の相互の関係、および周辺諸地域と当該地域との関連についての知識である。地域の現実の上に人間の理想が成立するのであるから、その具体的で正しい知識がないと、その上に描く将来像も具体的とはならず、また誤ったものになる可能性もある。とりわけ当該地域を構成する自然的（いわゆる地理的環境の内容をなす地理的位置・地質・地形・気候・土壌・動植物などで、これら諸事象も相互に関連をもちながら、全体として地域的特性のある状態をつくり出している）諸事象と人文・社会的諸事象との間の諸関係である。そしてこの関係は時間的推移のうちにとらえられ、認識されねばならぬことである。ここで歴史的存在としての人間の行動が注目されるのである。この時間的推移（あるいは時間的流れ）は地域により問題により長短さまざまであり、あるものは先史時代や古代から、あるものは近代や現代の短い時間的推移のうちにとらえられる。そしてこの地域を構成する諸事象間の関係にはそれぞれ因果の関係があり、そこにはすべて人

間の行動やその動機がある。ここに応用地理学が歴史地理学に配慮すべき要点がある。歴史地理学はかくて応用地理学の指針となり、応用地理学は歴史地理学をその基礎とすることができるのである。

Ⅲ. 道路建設と古代道路

人間の理想に基づく地域のあるべき将来像とその現実化の過程に関しては、人文地理学や歴史地理学の多くの研究業績が積み重ねられてきた。例えばわが国における古代の農村計画や都市計画、あるいは近世の新田開発、明治以降の日本の工業化による地域の変容、交通路の開発や整備と地域の変容など、多様な成果が出されてきている。筆者もかつて、丹沢山麓の山村社会の変容について実態調査を行ったのち、25年を経て再調査を行い、25年間の山村社会の変容は、この山村と江戸時代から交渉のあった相模平野の工業化の進展によるものであることを報告した³⁾。地域に対するさまざまな計画の実施やそれによる変化は、居住地域を拡張環境をよりよいものにしてしようとする理想や願望の実現を目指すための努力の結果であり、慎重な配慮のもとで実施されてきたものである。その場合、地域の何をどうすればどういう結果になる、との過去の究明がどうしても必要となる。かくて応用地理学にとっては歴史地理学は具体的な地域の将来像を浮かび上がらせるための基盤となるのである。

地域の変化や諸現象の中には、どのような地域、時代に、いかなる目的で、どのような方法で、どのような過程を経て形成されたかなどの問題があり、地域景観の変化の底には因果の関係がある。藤岡謙二郎のいわゆる景観変遷史的方法は景観変遷の過程を辿り、それをもたらした要因を探る。このためには資料が豊富で収集し易い比較的新しい時代が多く選ばれる。第二次世界大戦後における工業化や都市化の問題や大規模な地域開発による

地域の変貌などさまざまであるが、いっぽう先史時代や古代にまでも遡る長大な変化の過程を辿り、その中に前と似通った状態が目立つ場合には「歴史は繰り返す」と思われることもあり興味がある。これも将来像を描く場合の一つの手掛かりになるといえる。

奈良盆地の南部を東西に横断するいわゆる横大路の起源については、藤岡謙二郎は仁徳時代にさえ遡る古墳時代にまで求められるのではないかという。「日本書紀」の推古21年の冬11月の記事に「掖上池、畝傍池、和珥池作る。又難波より京に至るまでに大道を置く」とあり、奈良盆地に多い溜池の掘さくとそれ以前に存在していた幹道を整備した古代の土木事業について述べたものである。8世紀に完成した平城京は基盤目状に街路が通る計画都市であった。また奈良盆地一帯は基盤目状の条里が施行されており、このような土地では当然のこととして道路は直線を通る。奈良盆地には平行して南北に通る上ツ道・中ツ道・下ツ道の3本の直線道路とこれに直交して東西に通る横大路の存在が早くから知られていた。この道路は現在の橿原市の八木以東の国道165号線で、以西は北から下ツ道に併行した南走してきた国道24号線に交わり、24号線はさらに大和高田市まで来て南の御所・五条の2市に至る。また国道165号線は大和高田市から西北走して河内国分に至って天理から来た国道25号線に合する。国道165号線は、以上の国道線と重複する東西約10kmの国道を中心として、現在、東から櫻井（市制施行昭和31年）・橿原（同昭和31年）・大和高田（同昭和23年）の3市が接続している。これらの3市はいずれも古い発生の歴史的核をもつ歴史的都市である。藤岡はこれら古い横大路の幹線道路に沿って発生、成長した3市の明治以降の都市的進化と現状（昭和35～45, 49年）の模様を統計を使って比較する。

この3市にみられるここ10年間（統計で）の傾向として、奈良県のDIDを有する9市

の大小の差はあれ、いずれもがその発生時代を異にする1つ、または2つの歴史的核を中心として、市街地が発展したものである。これらは奈良盆地の各地に分散分布し、その間になおコナベーションが進行していないことや、都市進化上では目下進行中の段階にあるものが多い。人口数は橿原・大和高田・櫻井の順で近鉄橿原線と大阪線の交叉する橿原市が最も多く、市域全体に占めるDIDの面積は大和高田・橿原・櫻井の順序、また工業は谷口集落として発達した櫻井が木材工業、残りの2市は繊維工業が中心である。事業所はほぼ匹敵する。これら3都市はそれぞれ地域の特徴を示しながら、交通路に沿う歴史的都市としての展開を示し、奈良盆地の他の都市とともに、大阪市と深い関係にある。明治はじめの奈良盆地の町村はいずれも十字に交叉する主要な街道に沿うて発達した商業交通集落であった。櫻井は初瀬川の谷口集落として形成をみ、宇陀や吉野山地等参宮街道に沿うて伊勢、伊賀方面にも関係が深く、伊勢・熊野方面からもたらされたさばなどの魚市もたった。横大路に沿う3市の歴史的核の付近には、すでに古代の駅家や郡家、寺院などが存在していたことが明らかであり、その中で最も古いのは遺跡の豊富な櫻井市であると思われる。それはここが谷口に当り、大和川と横大路といった水陸両交通の結節点にあたることによる。藤岡は横大路に直角に交わる上・中・下の3道は、やはり横大路と同じく大化前期古墳時代に遡ると考え、この下つ道は藤原京の完成と共に、その西大路をも兼ねる道路として整備されたと考えている。そして、さらにつぎの平城京の朱雀大路の延長線になって、奈良盆地における条里地割の再編成の場合の基準線、そして南海道に通じる横大路にならぶ主要な幹線道路となったと考えている。また大和川、奈良盆地に入って本流の初瀬川、高取川、飛鳥川、寺川も水運に使われた。今日、以上の3市は大阪への通勤・通学

人口が卓越しており、古代における商業交通機能の卓越を継承していると考えられることができる⁴⁾。

悪いことで定評のあった日本の道路が整備されてきたのは、1960年代から始まった急速なモータリゼーションの結果である。道路公団で高速道路の計画・建設に携わってきた武部健一氏は、土木学会の論文⁵⁾で幹線道路網の歴史的変遷を概観して、その制度面と技術の実態の両面から見た日本の道路の歴史を4期に時代区分する。すなわち①古代の七道駅路時代 ②江戸時代の五街道時代 ③明治期の国道時代 ④昭和後期の高速道路時代である。①から③の各時代は中央集権の国家が成立することによって全国的な交通網の整備が必要になった時期であるが、④の時期は自動車为主要な交通機関になったために一時代を画することになったものである。武部氏はこの論文の中で最初の古代道路と最後の高速道路に似通った点が多いという。武部氏は中国での高速道路網の建設計画にも関与しているが、中国の関係者に対する助言として、秦の始皇帝が建設した馳道^{ちどう}に始まる古代の道路網の研究が高速道路網建設にとってきわめて有用であることを提言している。「温故知新」という教訓を実際に学ぶことになるという。

また、武部氏は古代の駅と高速道路のインターチェンジがほぼ同位置にあることが多いことを指摘している。例えば中央道の土岐から伊北までの間の9インターチェンジの位置を、同区間の東山道の9駅に対比すれば7カ所がほぼ同じ地区にあり、九州縦貫道の久留米―八代間では9カ所のインターチェンジに対して、古代道では10駅あって1駅多いだけで、横断道の鳥栖―武雄間では5インターチェンジと5駅がほぼ対応している。このように古代駅路と現在の高速道路の路線が共通するのは、ともに既存の集落を通ることなく、独自のサービス施設を置いて、目的地へ最短距離をとるように路線を決定するので、お

のずから似通ったものになるのである⁶⁾。

そして木下は「干拓工事やダム工事も、食糧が不足していて耕地の拡大が望まれていた時代や、農業・工業用水が不足していた時代には、それが必要であったことは確かであるが、すでに耕作が制限されている現在もなお干拓地を、また重化学工業中心の時代から離れた現在もなおダムを、それぞれ必要とするだろうか、これらも生産形態の変化に順応できないで、惰性のままに事業が進行しているように思えるのである。」⁷⁾と感慨を述べている。人間の自由な地域的理想の実現ともいふべき応用地理学にとっては、過去の歴史地理的現実の執着して、それとの関係を決定論的に考えるのもいささか行き過ぎであるといふべきであろう。

〔付記〕

本稿は第161回特別例会—平成6年1月22日於日本大学—にて報告したものに若干加筆したものである。

〔注〕

- 1) 拙稿「野外調査と地理学」, 『史苑』44-1, 1985, 1~9頁。
- 2) 九学会連合利根川流域調査委員会『利根川・自然・文化・社会』, 弘文堂, 1971, 572~586頁。
- 3) 拙稿「煤が谷山村の変貌」『日本大学地理学科五十周年記念論文集—関東とその周辺—』古今書院, 1975, 199~217頁。
- 4) 藤岡謙二郎『景觀変遷の歴史地理学的研究』, 大明堂, 1978, 227~245頁。
- 5) 武部健一「日本幹線道路網の史的変遷と特質」『日本土木学会』『土木学会論文集』, 1985, 359頁。
- 6) 木下良『道と駅』大巧社, 1998, 13~189頁
- 7) 前掲6) 196頁。

Historical Geography as the Foundation for Applied Geography

Eiichi NAKADA

Applied Geography has been popular in the Geographical field world wide since the end of World War II.

Geography had practical applications as many Geographers took part in development planning or building of countries or regions. Historical Geography, which concerns itself with what happened to a particular region in the past, relates to applied geography being effective in the future.

Concrete plans for future development should not be contemplated without first obtaining a through knowlege of past patterns of development and the purpose of such development. In this way, historical geography can provide the basis for plans which will make provision for resident's vision of how they would like to live.

To realize it, it is necessary to be recognized regional changes and structure of development, and interrelations in the various things consisting of regions or relations between cause and effect in changing them should be considered. The researches of historical geographers ought to be reflected in the works of applied geographers.